

喫煙者は心臓血管死が 5.5 年早まる

心臓血管病の発症率は加齢とともに上昇し、イベントの多くは高齢者にみられる。心臓血管病の発症を抑制するには、高齢者のリスク因子を管理し予防することが重要とされる。そこで本研究では、60 歳以上の集団における心臓血管死、急性冠動脈イベント、脳卒中イベントへの喫煙および禁煙の影響についてメタ解析を実施し検討した。従来の疫学的な相対リスクに加え、心臓血管死のリスク進展期間（あるリスク因子に暴露した集団において、暴露していない集団と比較し、そのリスク因子に起因するイベントの発生、すなわち疾患の発症や死亡が早まる期間）を算出した。

解析には 25 のコホート（欧米 23 カ国）のデータを用い、60 歳以上の 503,905 例が対象となった。生涯非喫煙者が 40.2%、元喫煙者が 47.4%、現喫煙者は 12.4%であった。このうち 37,952 例が心臓血管病により死亡した。非喫煙者に対する喫煙者の心臓血管死のハザード比は 2.07、元喫煙者のハザード比は 1.37 となった。リスク進展期間は喫煙者で 5.50 年、元喫煙者で 2.16 年と喫煙者、元喫煙者ともにリスクが有意に高かった。また、喫煙者の心臓血管死のリスクはタバコの消費量が多いほど高くなり、元喫煙者のリスクは禁煙の期間が長いほど低かった。急性冠動脈イベントや脳卒中イベントにおいても同様のパターンがみられたが、心臓血管死よりもわずかにリスクは低かった。今回の知見は、高齢者においても喫煙が心臓血管イベントおよび心臓血管死の独立した強力なリスク因子であるという従来のエビデンスを支持し、さらに発展させるものとなった。喫煙者では心臓血管死が 5 年以上も早まることが明らかとなり、高齢者の禁煙がリスク抑制に有効であることが示された。

出典：British Medical Journal. 2015; 350: h1551. doi: 10.1136/bmj.h1551